

3.2.3 イベントをきっかけにして生まれるボランティア活動とはどのようなものか？

国際的なイベントや地域のイベントの準備・運営に、ボランティアが協力することが多くなってきた。これは、ボランティア活動を始めるきっかけが多様化していることを意味しており、イベント自体の楽しさもあいまって、これまでボランティア活動をしたことがない人が気軽に始めることができる契機となっている。

一方、イベントの主催者がボランティアを安上がりな人材としてみなす場合も出てきている。ボランティアが主体的に関わる場面が限られると、ボランティア活動の面白さ・楽しさを十分に享受できずに、ボランティア活動への関心を低下させてしまいかねない危険性がある。また、大規模なイベントでは、行政、企業、学校、ボランティア団体や NPO などの複数の団体からボランティアや応援のための人手が参加することが多く、活動を円滑に行うためには、これらの団体間の調整が必要となってくる。

そこで、ボランティアが担当する仕事を主体的に行っていけるように、また、関係団体の垣根を取り払った調整の場として、ボランティア実行委員会等をつくることが考えられる。ボランティア実行委員会を機能させることは、主催者にとって手間がかかることではあるが、ボランティアが自主的・主体的に活動できる環境づくりを行うことによって、ボランティア自身が創意工夫のもとに質の高い活動を行っていくことが期待できるのである。

(1) イベントへの参加から始めてみるボランティア活動

各地では様々なイベントが行われており、次表のように、企画、準備、当日の運営等にボランティアが活躍している。

< ボランティアが活躍するイベントの例 >

イベント名	イベントの概要	ボランティアの役割
大船渡・かがり火まつり (岩手県大船渡市)	大船渡市は、三陸地方の拠点として海とともに栄えてきた。そのため、国民の祝日「海の日」を記念し、海・自然の大切さを再認識するイベントとして平成8年にスタート。大船渡市産業振興部商工観光課内に大船渡・かがり火まつり実行委員会を組織。市民の手で創り上げるまつりとして、地域融和と観光客の誘致、地域活力の創出による活力増進を図ることを目的としている。	市民の手で創り上げるまつりとして、約500人近いボランティアが参加。企画委員のアイデアも出来ることから取り入れ、市民が楽しみながら参加できるまつりを目指している。具体的には、かがり火幻想夜で輝きを放つ「夢あかり」の製作、当日の会場設営、かがり火の管理、交通整理等にあたる。実行委員会では、ホームページ等においてボランティアを募集している。

イベント名	イベントの概要	ボランティアの役割
しんゆり芸術 フェスティバル (神奈川県川崎市)	川崎市の新百合ヶ丘駅周辺は多くの芸術・文化関係者が居住し、映画、音楽などの学校や映画館が立地する地域である。川崎市では、これら文化資源を生かした新しいまちづくりとして「芸術のまち構想」を推進しており、このまちづくりを象徴するイベントとして平成7年にスタート。学識者、映画や音楽の学校関係者、地域住民、市からなる芸術のまちづくり推進委員会が、映画祭やコンサートを開催する。	市民の自主的な活動に、映画や音楽などの文化・芸術機関、市が協力してフェスティバルをつくりあげる。映画祭は毎年テーマを決め、市民ボランティアが企画・運営を担う。中学生、市民ボランティア、日本映画学校の専門スタッフのパートナーシップで制作された映画では、4ヶ月程前から中学生やボランティアを公募し、専門スタッフの講習を受けて、脚本づくりから配役、出演、撮影を自ら行い、ボランティアがスケジュール調整などをして映画づくりに取り組む。
大毘沙門焼大祭 (新潟県六日町)	戦国時代の越後にまつわる歴史をもとに計画され、平成11年にスタート。先祖を敬う送り火として、無病息災を祈願して行われる。字画の大きさは世界一の規模。祭りの企画・実施は、地元「雪国青年会議所」OBメンバーを中心に構成された実行委員会が担う。	「自分達の祭りを、自分達の手で」つくりあげるといふ思いで、祭りの企画・運営を行っている。実行委員会では、ホームページ等においてボランティアを募集し、1ヶ月程前から草刈り、山焼き、ポスター貼り、資材搬入等の準備を始める。また当日、大毘焼きに火を付ける人、御神火行列への参加者も募集する。
ライブジャック7 (京都府宇治市)	宇治市等で音楽活動をしている若者に発表の機会を提供する場として、平成9年にスタート。宇治市文化自治振興課のもと、公募で集まった若者が自由な発想で企画・運営するライブイベント。6月にたくさんのバンドが出場するライブと、8月に観客アンケートをもとに選ばれたバンドが出場するライブを計2回開催。	概ね30歳以下の若者を中心にしたボランティアが実行委員会を組織し、イベント全体の企画・運営、PR活動、出演バンドの募集・連絡調整、当日の運営などにあたる。

地域づくり百科「地域づくり団体プロフィール集」<http://www.chiiki-dukuri-hyokka.or.jp/>より作成

(2) イベントを母体にして、新しいボランティア活動が生まれていく

団体名		全日本どろんこ田んぼバレーボール協会(長野県辰野町)	
	活動開始年	西暦 1996年 8月 活動開始	
	メンバー 人数	<役員数> 14名 <事務局スタッフ数> 会員で有志参加 <ボランティア数> 地域の住民全員 <賛助会員数> 64名位 <その他> 集落戸数 70戸 住民 300名	
		構成	役員は会社員がほとんどで、公務員が少し 地域のボランティアは兼業農家がほとんど
	予算規模	平成13年度概算 協会本部会計 大会会計 収入 267,749円 収入 228,050円 支出 61,492円 支出 220,723円	
団体の目的		農業を通じ土づくりの大切さ土の温かさを肌で感じつつ、自然のはぐみを多くのひとに知ってもらおうと共に、「どろんこ田んぼバレーボール」により体力の向上と地域交流を図るため、競技大会の開催と競技の普及を目的としている	

ボランティア活動の概要

大会の企画は役員（無報酬）が主になって行いが、準備、運営、交通整理、資材提供はボランティアが自主的に行う。全国どろんこ田んぼバレーボール大会（通称：どろんこ田んぼバレーボール大会）を通じ、地域での自然保護活動や花いっぱい活動といった自主的なボランティア活動が抵抗なく受け入れられてきている。

ボランティアは特別な募集はしておらず、活動の都度各家庭に趣旨のチラシを入れて、自主参加をしてもらっている。

ボランティア活動を立ち上げた経緯

メンバーの住む辰野町渡戸地区は70戸約300人が暮らす山間地にある。春から秋にかけて自然の景観がすばらしく、少子・高齢化は少しずつ進んでいるが、空家は少なくみんながゆったりと暮らしている地区である。しかし、近年の減反政策によって、稲作からの作付け変更を余儀なくされ、農家の意欲が減退してきた。

そこで、なにか田んぼを使って「遊び」ができないかと、いつもの飲み仲間（集落に住む40歳代の男衆）が頭を突き合わせ、「あーでもない、こーでもない」と酒を酌み交わしながら考えた。たまたまその頃「ビーチバレー」が有名になり、「俺たちにゃ、田んぼがある。田んぼでバレーボールをしよう。」ということになった。それからは、協会の立ち上げと会員募集、競技ルールづくりに夜な夜な集まって知恵くらべ。それでも、なんとかまと

まって、平成8年8月8日に協会が立ち上がったのだった。出来るだけ農業に使われている道具を使い、手作りのできるように心がけた。ルールはトリムバレーボールの5人制を採用した。入賞商品は地域でとれた農産物が主体で、ときには付近で捕れた「田舎どじょう」も加わる。

第1回大会を平成9年7月に開催し、晴天にも恵まれて、7チーム50人が参加。参加者には、初めての体験にとまどいながらも、土の感触と競技を楽しんでもらった。参加チームはPR不足から地元の寄せ集めだったが、アマチュアカメラマンが100人も押し寄せ大賑わいだった。このときの写真があちこちで取り上げられて、以後の大会には参加申し込みが倍倍と増えていった。昨年の第6回大会には120チームの申し込みがあったが、会場の都合によって56チームに限定させてもらった次第である。

参加チームには若い人が多く、この日は集落がぱっと明るくなったようになる。

大会の運営は役員中心に企画しているが、準備や案内、豚汁のサービスなどに、地域の人々が自主的にボランティアとして参加してくれている。これを契機に、地域の貴重な資源を大切に作る取り組みが始まっている。

活動を行ううえでの困難点と工夫

地域の皆さんの理解と協力があり、困難は余り感じていないが、役員が皆勤め人なので、会議などは夜間が多く日程調整に気を使う。この対策として役割分担を細かくして、会議を最小限にしている。

申し込みが多数となったため問い合わせが頻繁にあるが、担当理事が会社勤務のため対応しきれない状況である。問い合わせはできるだけハガキかメールでされるようPRしている。

活用している支援

できるだけ手作りでお金をかけないようにしているが、人が集まればお金はかかる。地区の営農組合と耕地(町内会のようなもの)から補助金をもらっているが、できれば、チーム参加費で運営したいと考えている。

活動を継続するための工夫など

メンバーには勤めの人が多いのだが、休日に行事が集まるので、出来るだけ年間計画をたてて調整するようにしている。退職して自宅で農家をしている人が割合多いので、準備などはこの人たちにできるだけお願いをするなどの役割分担の工夫をしている。地域全体の活動ととらえて、集落内の各種団体も構成員となってもらっている。

今後の課題と展望

現在、どろん田バレーボール大会は参加申し込みが多く盛況のうちに開催できているが、

あちこちで同種の大会が増えている。差別化を図るためにも、手作りで農業にこだわり、心のこもった大会をしていきたいと思っている。

特定の役員が協会設立から継続して担当しているため、次世代へのバトンタッチをスムーズにできるよう、人材の育成を図っている。

谷間の集落なので、参加チームの増加とアマチュアカメラマンの増加で駐車場が不足しており、駐車場の確保が課題となっている。

今年も、「どろん田バレーボールをオリンピック種目に 追いつけ追い越せビーチバレー」を目標に大会準備が始まった。

ボランティア活動の成果

どろん田バレーボール大会の開催場所として提供いただいた「たんぼ」の管理を契機として、たまたま集落の大きな稲作者が耕作をやめたことから、水田の一括管理をするため集落全戸加入の「営農組合」が結成された。

営農組合の活動は水田の委託耕作が主だが、この活動のなかから、地域内の自然排水路の管理をして、どじょうや蛭などの水生生物の営みに「ちょっとお手伝い」をするボランティア団体「ほたる君とどじょっこ倶楽部」が誕生した。さらに、休耕田を花畑にしたり農道沿いを花で飾るボランティア団体「愉快的ひまわり仲間」が結成されていった。

また、これらの活動と合わせ、谷間の7集落が集まった「信州かわしま花街道連絡会」が立ち上がり、川島の谷の全体の景観づくりのために活動している。

自分の住む地域を自分たちで住み良くするために、自分たちでできることは自分たちでする活動が、少しずつ広がっていると自負している。



< 試合風景 >



< 米袋で作った手作りの優勝旗 >

(団体理事によるレポート、団体資料より作成)

<事例のポイント> 地域おこしのためのイベントが気軽なボランティア活動の機会に

ボランティア活動には、ボランティア団体を結成して常時活動を行うタイプのものと、イベント開催のために一定期間だけボランティア活動を行うタイプとがある。全日本どろんこ田んぼバレーボール協会の事例は、後者の例である。この事例では、盛況のうちに毎年イベントが継続されているが、単発のイベントでボランティア活動を行う場合もある。

イベントの企画・準備・運営に関わるボランティア活動は、イベントそのものの楽しさも手伝って、誰もが気軽に参加しやすいものである。このような機会は、ボランティア活動への関心はあるが、なかなか参加のきっかけをつかめないでいる人々にとって、最初の一步を踏み出すための好機となる。

<事例のポイント> 地域の人々の参加を歓迎する手作りのイベント

イベントの企画・運営のコアの部分は、協会の役員を中心に行っているが、それ以外の準備や当日の案内、豚汁などの参加者へのサービス等に、地域の人々が自主的に参加することができる体制となっている。また、この団体の役員には勤め人が多いので、予め年間計画を立てて日程調整ができるようにする、役割分担を明確化して会合の回数を減らすなどの工夫がなされている。イベント開催にあたっては、企画・運営のコア部分を担うボランティアへの負荷が大きくなることから、このような工夫が効果的である。

どろん田バレーボール大会は地域のボランティアによる手作りのイベントであるが、この他に、行政が実施するイベントにボランティアとして参加する場合もある。このような場合には、ボランティアが自主性をもって支援活動をすることができるように、ボランティア委員会のようなボランティア主体の組織を作って、主催者側と役割分担等について話し合いながら進めることが望ましいと考えられる。

<事例のポイント> イベントから新しいボランティア活動が誕生

この事例では、全日本どろんこ田んぼバレーボール大会のイベント開催を通じて、開催地区の農家の間の結束が強まり、集落全戸加入の営農組合が結成された。ボランティア活動が地域のまとまりを強くすることに貢献した事例である。

この営農組合の活動を通じて、自然排水路の管理をして水生生物が住みやすい環境づくりを行うボランティア団体や、休耕田を花畑にする等の活動を行うボランティア団体等が生まれていった。

この事例が示すように、イベント開催を通じて得られたボランティア活動の体験が、次のボランティア活動へとつながっていく可能性がある。イベント開催後に、もっとボランティア活動をしてみたいと思っている人々に活動機会の情報を提供したり、あるいはイベント・ボランティアの有志が集まってボランティア活動を行おうとする取り組みを丁寧に支援していくことも、ボランティア活動のすそ野を広げていくうえで重要である。